

戦争は人間の本能ではない



奈文研の
佐原さん

考古学のデータ集め新論

「縄文時代に戦争はなかった。人間には、闘争本能があるから戦争は避けられない」という考えは間違いだ——考古学の資料を裏付けに、奈良国立文化財研究所の佐原真・研究指導部長(まこと)がこのほど出版した「大系日本の歴史—日本人の誕生—(小学館)」の中で、新しい戦争論を主張している。これまで、「戦争は人類の最初からあった」「日本では、縄文時代にすぎなかった」とする説が多い。これに対し、同部長は「戦争の発生は農業の開始後で、人間は本来、戦争の原因にされる闘争本能を持っていなかった」と、いい切っている。

「武器に変質した」と考えた。住居群の周囲に壕(ぼり)をめぐらしたり(環壕集落)、平地を避けて二、三百坪の丘の上に住む(高地性集落)防衛的な村が現れ、武器を副葬した戦士の墓が見られるのも、この石鏃の変化とほぼ同じ時代。

これまでの説では、約五十年前の北京原人の頭骨にある穴を、脳を取り出して食べた跡とみて、「人類は闘争本能を持ち、最初から争い、殺し合っ

りキーは、南アメリカの食料採集部族調査の結果、身内同士が愛する人の死をいたんで死者の肉を愛惜込めて食べる部族(族内食人)の方が、倒した敵を憎んで食べる部族(族外食人)よりほるかに多い事実を明らかにしている。このことと合わせ、佐原部長は「縄文人にも、時には争いや殺人はあっただろうが、集団同士が争って殺し合った証拠はない。日本でも

朝日新聞
87(S62).11.22

石鏃じりの変化に注目

武器は農耕社会以後に

佐原部長は、矢の先端につける石の矢じり(石鏃)せきぞくの変化に注目した。狩猟など食料採集社会だった縄文時代(約二万年から二万三千年前)、石鏃はどれも長さ二センチ未満、厚さ1ミリ未満で、重さは一グラム以内にとどまる。これは、縄文時代の約一万年間、ずっと変わらない。ところが、農耕社会の弥生時代(約二千三百年から千八百年前)になると、突然、それがひと回り大きくなり、重量も三十五倍もの二倍前後のものになり、スピードは落ちるが、深く刺さる。動きの早い獲物を射るのに適した大きさ、重さが見られ、当時から戦争があった根拠にされている。だが、イギリスの人類学者リチャード・

世界でも、農業が始まり、文明社会に入って初めて、武器が生まれ、本格的な戦争が始まった」としている。

本能論で肯定する

最近の風潮に警鐘

金岡恕・天理大教授(考古) ナでも、農業が始まると同時に城壁をもつ防衛的集落がつから

れている。縄張り争いのような生存のための戦いはそれ以前からあったかもしれないが、武器を発明して集団同士が殺りくするのは、たしかに農業の開始潮に警鐘を鳴らすもので、現代的意義も高い。



狩りの道具だった縄文時代の矢じり(右の2個)と、武器に変質した弥生時代の矢じり(左の3個) 一同書より